

教室における規範逸脱行動に関する行動基準と態度

－「周囲の他者」に着目して－

出口拓彦

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育臨床心理学))

Students' principles and attitudes toward classroom rule-breaking behavior: focusing on their neighborhoods

Takuhiko DEGUCHI

(Department of Psychology, Nara University of Education)

要旨：本研究は、授業に関する規範逸脱行動に対する行動基準・態度について、自分の周囲にいる他者に着目して検討した。大学生198名を対象に質問紙調査を行った。規範逸脱行動は、メール、出席の代返、内職、居眠り、授業と無関係の私語、授業に関する私語、という6つを扱った。これらの行動ごとに、「自分も周囲も遵守」「自分は遵守、周囲は逸脱」「自分は逸脱、周囲は遵守」「自分も周囲も逸脱」という状況に対する自分と他者の態度について、それぞれ回答を求めた。そして、回答された態度を、「遵守」「逸脱」「同調」「反対」および「中立」の5つの行動基準 (e.g., Deguchi, 2014) に分類した。分析の結果、「他者は、自分の行動基準と同様の行動基準を有している」と学生は考えている傾向が示された。さらに、「自分の行動基準」「他者の行動基準」とともに、私語の頻度に影響を及ぼしている可能性も示唆された。

キーワード：規範逸脱行動 rule-breaking behavior

行動基準 principles

態度 attitudes

1. はじめに

授業中の私語やメールの使用等、教育場面での規範逸脱行動は、多くの研究で扱われている (e.g., Durmuscelebi, 2010; 北折, 2006; 北折・太田, 2011; 水野, 1998, 2001; 島田, 2002; 杉村・小川, 2003)。規範逸脱行動の研究においては、行為者自身が持つ規範意識の影響 (e.g., 出口・吉田, 2005) だけでなく、周囲にいる人々の影響 (e.g., Cialdini, Reno, & Kallgren, 1990; 北折・吉田, 2000; Reno, Cialdini, & Kallgren, 1993) にも着目されている。特に、「多くの人々が実際の行動としてとるであろうとの知覚に基づく、行為的な」(北折・吉田, 2000; p.30) 規範は「記述的規範」と呼ばれ (e.g., Cialdini et al., 1990)、「多くの人々が適切・不適切と知覚することに基づく」(北折・吉田, 2000; p.30) 規範である「命令的規範」と区別されている (Cialdini et al., 1990)。

これらの研究を基に、出口(2014)は、ゲーム理論 (e.g., Rapoport & Guyer, 1966; Scodel, Minas, Ratoosh, & Lipetz, 1959) や相互依存性理論 (e.g., Kelly, Holmes, Kerr, Reis, Rusbult, & Van Lange, 2003; Thibaut & Kelley, 1959) における利得行列ないし成果行列を援

用し、規範逸脱行動に対する態度を測定している。具体的には、「私語」や「メール」など、教室における規範逸脱行動を含んだ5つの行動に対する態度を、自分と他者の行動 (規範を遵守する、逸脱する、の2種類) を組み合わせた、2×2の4つの仮想場面を設定することによって測定している。すなわち、①「自分も周囲も遵守」(R)、②「自分は遵守、周囲は逸脱」(S)、③「自分は逸脱、周囲は遵守」(T)、④「自分も周囲も逸脱」(P)、という4つの場面を設定し、それぞれに対する満足度について7段階で評定を求めている (R, S, T, Pの意味については、Axelrod (1980a, 1980b, 1984)、出口 (2014) や齋藤 (1999) 等を参照されたい)。そして、RとT, SとPの大小関係を基にして、「遵守」「逸脱」「同調」「反対」「中立」という5つの行動基準 (e.g., Deguchi, 2013, 2014) に分類している。

なお、「遵守」「逸脱」という語については、「行動基準の分類」を示す場合と、自分や他者の「行動」(利得行列における「戦略」)を示す場合の双方がある。英語表記の場合、前者は「obedient」「deviant」、後者は「obeying」「breaking」というように異なった語が用いられるが (Deguchi, 2014)、日本語表記の場合、どちらも「遵守」「逸脱」という同一の語となる (e.g.,

出口, 2014)。混乱を避けるために、ここでは行動基準における「遵守」「逸脱」は基本的にかぎ括弧を用いて記載し、行動（戦略）における語は括弧なしで記載する。

5つの行動基準の概略は、以下の通りである。まず、「遵守」という行動基準は、「 $R > T$ かつ $S > P$ 」という態度の大小関係を持つ。すなわち、他者が（規範）遵守・逸脱のいずれの行動をとっても、自分は規範を遵守した方が、満足度が高い。例えば、 $R:S:T:P = 5:4:2:1$ であれば「遵守」に分類される。次に、「逸脱」という行動基準は、「遵守」とは逆の大小関係（「 $R < T$ かつ $S < P$ 」）を持つ。つまり、他者が（規範）遵守・逸脱のいずれの行動をとっても、自分は逸脱した方が、満足度が高い。「同調」は、「 $R > T$ かつ $S < P$ 」であり、他者と同じ行動を取ったときの方が、他者と異なった行動を取ったときよりも、満足度が高くなる。「反対」は「同調」の逆で（「 $R < T$ かつ $S > P$ 」）、他者と異なった行動を取ったときの方が、他者と同じ行動を取ったときよりも、満足度が高くなる。最後に、「中立」（「 $R = T$ かつ $S = P$ 」）は、他者の行動にかかわらず、自分は遵守・逸脱のいずれの行動を取っても、満足度に違いは生じない。

この行動基準の分類を用いて、出口（2014）は、大学生を対象とした質問紙調査を行い、行動基準と規範逸脱行動の頻度の関連について検討している。その結果、「逸脱」の行動基準を持つ学生は、「遵守」の学生よりも、全般的に、規範意識が低く、逸脱頻度は高い傾向があることが示された。また、「同調」の行動基準を持つ者が最も多い一方で、「反対」は非常に少ないことも見いだされた。

なお、小牧・岩淵（1997）は、「私語」については、この行為を学生は否定的に捉えてはいるものの、これ（私語）をしている、という状況があることを報告している。さらに、卜部・佐々木（1999）は、生徒は「否定的な私的見解」（授業中に私語をすることに対して、自分がどのように思うか）を持ってはいるが、クラスの私語規範（「クラスみんな」が私語に対してどのように思うかについて、自分がどのように考えるか）に応じて私語をしている可能性について考察している。このことから、自分が持つ行動基準のみならず、他者が持つ行動基準（「他者が持っている」と自分が認知している行動基準）も、規範逸脱行動の頻度に影響を与えている可能性が考えられる（なお、卜部・佐々木の研究における「私的見解」「私語規範」は、より厳密には、まずクラスごとに平均を求め、次にクラスごとに求めた平均の中央値を用いて分析されている、すなわち、個人単位ではなく、クラス単位での指標である）。

そこで、本研究では、規範逸脱行動に対する行動基準ないし逸脱頻度に関する以下の3つの事項について

検討することを目的とした。①周囲の他者が持つ（と自分が認知する）行動基準の分布。②周囲の他者が持つ行動基準と、自分の行動基準との関連。③周囲の他者が持つ行動基準と、自分の逸脱行動（授業中の私語）の頻度の関連。

なお、授業中の「私語」については、出口・吉田（2005）は、「授業と無関係の私語」と「授業に関する私語」の2つに分類している。しかし、出口（2014）では、両者を区別しないで行動基準の測定が行われた。このため、本研究においては、2つの私語を区別して行動基準の測定を行うこととした。

2. 方法

2.1. 調査対象者および手続き

四年制大学の学生198名（男子78名、女子119名、不明1；平均年齢19.19歳、 $SD = 2.07$ ）。調査対象者は、履修者100程度の比較的多人数で行われる授業の受講者であった。質問紙は授業ごとに集団で配布した。調査時期は2008年度後期であった。

質問紙は匿名式で実施した。質問紙の最初には、質問紙調査についての概要を記載した他、回答したくない項目は記入しなくてもいいことや、回答の内容が授業の成績に影響することは一切ないこと等についても記載した。

2.2. 測定した変数

2.2.1 規範逸脱行動に対する態度

「授業中に携帯メールを使用する」（メール）、「授業の出席を取るときに代返をする」（代返）、「授業中に、いわゆる『内職』をする」（内職）、「授業中に居眠りをする」（居眠り）、「授業と無関係の私語」（私語1）、「授業に関する私語」（私語2）、という逸脱行動を扱った（吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折（1999）、小牧・岩淵（1997）等を参考にした）。「私語」「居眠り」「メール」は、出口（2014）でも扱われた行動であり、「私語」は周囲の他者に大きな影響を与えるが、「メール」「居眠り」は直接的な影響は比較的少ないと考えられる（出口, 2014）。「内職」については、「メール」「居眠り」と同様の特徴を持っていると思われるが、学業に関する行為である点が異なる。一方、「代返」は一種の不正行為であり、公正な成績評価の妨げ等になる可能性が考えられる。

これらの規範逸脱行動に対する態度について、出口（2014）と同様の方法で測定した。これは、黒川（1990）による測定方法を参考にしたものであり、「自分も周囲も遵守」（R）、「自分は遵守、周囲は逸脱」（S）、「自分は逸脱、周囲は遵守」（T）、「自分も周囲も逸脱」（P）、という4つの仮想の状況において、自分がどのように思うのかについて回答を求めた。

測定の際、「メール」「代返」「内職」「居眠り」と「私語」（私語1・私語2）では、一部、異なった方法が用いられた。まず、「メール」「代返」「内職」「居眠り」の4つについては、「もしも、以下のような状況になったとしたら、あなたは満足ですか？ それとも不満ですか？」と文章で示し、逸脱行動ごとに、“1”「自分も、周囲の人たちも、している」状況（P），“2”「自分はしているが、周囲の人たちはしていない」状況（T），“3”「自分はしていないが、周囲の人たちはしている」状況（S），“4”「自分も、周囲の人たちも、していない」状況（R）、という4つの項目を呈示した（括弧内のR, S, T, Pは質問紙には記載していない）。回答は、「7.とても満足」～「1.非常に不満」の7段階で評定を求めた。なお、「6」～「2」の各段階については、「とても満足」「非常に不満」のような程度を示す表現はつけなかった。「周囲の人たち」については、「各行為が行われる可能性がある場所にあなたがいる時、自分の周りにいる人たち（友人以外の人も含みます）」という教示を用いた（「メール」「代返」「内職」「居眠り」については、基本的に、出口（2014）と同様の方法で測定した）。

一方、「私語」については、出口・吉田（2005）等を基に、「授業と無関係の私語」（私語1）と「授業に関する私語」（私語2）に分類した。このため、A）私語をしていない、B）授業と無関係の私語をしている、C）授業に関する私語をしている、という3種類の選択肢を、「自分」と「他者（周囲の人たち）」は持つことになり、組み合わせ上、計9つの状況（自分3つ×他者3つ）が存在することになる。したがって、「私語」については、これらの9つの状況に対して、「7.とても満足」～「1.非常に不満」の7段階でそれぞれ評定を求めた。例えば、“「自分も、周囲の人たちも、していない」状況”（R）であれば、①「あなたも、周囲の人たちも、授業と無関係の私語をしている」状況、②「あなたも、周囲の人たちも、授業に関する私語をしている」状況、に加えて、③「あなたは授業と無関係の私語をしているが、周囲の人たちは授業に関する私語をしている」状況、④「あなたは授業に関する私語をしているが、周囲の人たちは授業と無関係の私語をしている」状況、の計4種類の状況を設定し、それぞれ回答を求めた。なお、「周囲の人たち」については、「あなたの席の近くに座って、授業を受けている人たち（友人以外の人も含みます）」と教示した。

質問項目は、①自分の態度（私語）、②他者の態度（私語）、③自分の態度（「メール」「代返」「内職」「居眠り」）、④他者の態度（「メール」「代返」「内職」「居眠り」）、という順で配置した。「自分の態度」については、「この授業で、もしも以下のような状況になったとしたら、あなたは満足ですか？ それとも不満ですか？」と問い、規範逸脱行動ごとに回答を求めた。一方、「他者

の態度」については、「この授業で、もしも以下のような状況になったとしたら、周囲の人たちは『満足だ』と考える、と思いますか？ それとも『不満だ』と考える、と思いますか？」と質問した。

2.2.2 私語の頻度

「私語1」「私語2」について、私語尺度（出口・吉田, 2005）を用いて回答を求めた。この尺度は、「私語1」「私語2」に関する項目各4つの、計8項目で構成されている。そして、「5.たくさんした」「4.かなりした」「3.ときどきした」「2.あまりしなかった」「1.ぜんぜんしなかった」の5段階評定で回答を求めるようになっている。

教示は、基本的に、出口（2014）と同様の方法で行った。具体的には、「いま受けている科目の授業での私語」に対して回答するよう求めた。さらに、「ここでの『私語』とは、『授業中に、学生同士で行う私的な発言』のことをいいます。このため、授業に関する私語（『授業内容に対する疑問点を話す』など）と、授業と無関係の私語（『笑い話をする』など）の双方を含みます。（ただし、先生が許可した場合の発言は除きます。）」（出口, 2014）と説明した。

2.2.3 その他

上記以外に、測定を実施した授業への出席率、年齢等について回答を求めた。

3. 結果

3.1. 分析の対象としたデータ

まず、質問紙上の項目の約半分が未回答であったものや、ほとんどの項目に対して全く同じ評定がなされたもの等については、以後の分析から除外した。次に、年齢が他の調査対象者に比べて高かったものについても、他の回答者と発達段階に差があると考えられたため分析から除外した。さらに、質問紙の印刷の際、用紙に「ずれ」が生じたものが1枚あり、質問項目の一部が途切れていたことから、これについても除外した。

以上のことから、計6つのデータを除外した、計192名（男子75名、女子116名、不明1）分のデータについて分析した。分析の対象としたデータにおける回答者の平均年齢は19.01歳（標準偏差0.65）であった。また、授業への平均出席率は9.46割（標準偏差0.91）であった。

3.2. 指標の算出

3.2.1 行動基準の分類

R, S, T, Pの値（「自分の態度」「他者の態度」ごと）を基に、出口（2014）の方法で回答者を5つの行動基準に分類した。まず、「メール」「代返」「内職」「居眠

り」については、それぞれ4つの状況（項目）に対する評定値をそのまま使用して分類した。次に、「私語」（「私語1」「私語2」）については、前述の通り、3×3の計9つの項目が存在する。このため、以下の方法で、異なった指標を算出した（なお、R、S、T、Pの算出に使用した項目については、「自分の態度」の分類に使用したものを記載しており、「他者の態度」の分類の際は、SとTに対する評定値を入れ替えた。これは、「他者」にとっては、「あなた」が「他者」になり、「周囲の人たち」が「自分」になるためである）。

①「私語1」…「授業と無関係の私語」が含まれている項目のみを使用した。具体的には、「『あなたも、周囲の人たちも、私語をしていない』状況」（R）、「『あなたは私語をしていないが、周囲の人たちは授業と無関係の私語をしている』状況」（S）、「『あなたは授業と無関係の私語をしているが、周囲の人たちは私語をしていない』状況」（T）、「『あなたも、周囲の人たちも、授業と無関係の私語をしている』状況」（P）、の4つを用いて分類した。

②「私語2」…「授業に関する私語」が含まれている項目のみを使用した。具体的には、「『あなたも、周囲の人たちも、私語をしていない』状況」（R）、「『あなたは私語をしていないが、周囲の人たちは授業に関する私語をしている』状況」（S）、「『あなたは授業に関する私語をしているが、周囲の人たちは私語をしていない』状況」（T）、「『あなたも、周囲の人たちも、授業に関する私語をしている』状況」（P）、の4つを用いて分類した。Rの状況については、「私語1」と同様の項目である。

上記以外にもS、T、Pの各指標については、「授業と無関係の私語」と「授業に関する私語」をどの程度区別するか（2種類の私語に関する項目を用いた合計得点をどのように算出するか）によって、複数の算出方法が考えられる（Rの指標については、「『あなたも、周囲の人たちも、私語をしていない』状況」であるため、算出方法は1種類のみ）。しかし、指標の算出方法に関する記述が複雑になるため後述（「3.3.3『私語の内容』の区別」に記載）した。

各行動基準の分布をFigure1-1、1-2に示した。「自分の行動基準」と「他者の行動基準」の比率の差について検討するため、規範逸脱行動ごとに周辺等質性検定を行った。その結果、「メール」「内職」において有意な差が示され（ $p < .05$ ）、「自分の行動基準」よりも、「他者の行動基準」の方が「遵守」の度数が低い傾向が示された。その他の規範逸脱行動については、有意な差は示されなかった。

3.2.2 私語の頻度

下位尺度ごとに α 係数を算出したところ、「授業と無関係の私語」（私語1）は.88、「授業に関する私語」（私

語2）は.83と、高い信頼性が示された。このため、下位尺度ごとに各項目に対する回答を合計し、項目数で割ったものを指標とした。

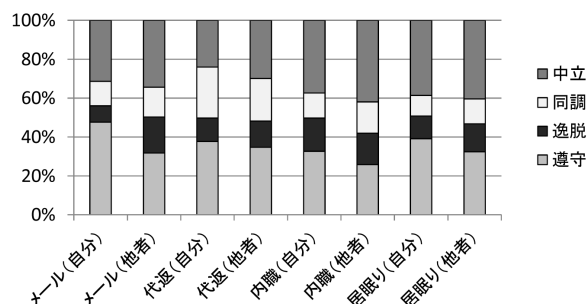


Figure 1-1 規範逸脱行動に対する行動基準の分布

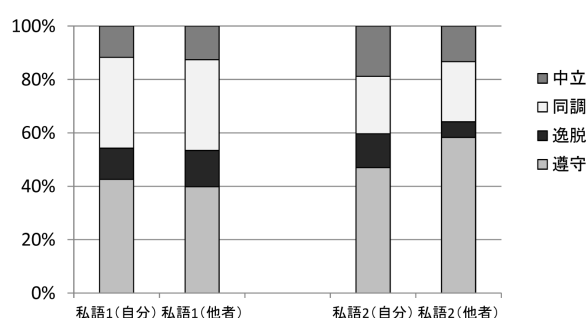


Figure 1-2 「私語」に対する行動基準の分布

3.3. 行動基準と各変数間の関連

3.3.1 自分の行動基準と他者の行動基準

自分の行動基準と、他者の行動基準の関連について4×4のクロス表を作成した（Table 1-1～1-6）。前述の通り、「反対」の行動基準については、出口（2014）と同様に、その度数が非常に低かったことから（最も高い「私語2」（「自分の行動基準」）でも3%未満）、以後の分析からは除外した。

モンテカルロ法によって度数の差を検定したところ、全ての規範逸脱行動において有意な差が示され（ $p < .05$ ）、自分と他者が同じ行動基準を持っていることを示すセルの度数が全般的に高い傾向が見られた（本研究においては、有意水準は5%に設定した。以後も同様）。すなわち、「他者は、自分の行動基準と同様の行動基準を有している」と学生は考えている傾向が示された。

3.3.2 行動基準と私語の頻度

行動基準を独立変数、私語の頻度を従属変数とした、1要因4水準の対応のない分散分析を、「自分の行動基準」「他者の行動基準」ごとに行った（Table 2）。その結果、「私語1」については、「自分の行動基準」「他者の行動基準」双方の有意な主効果が示され（ $p < .05$ ）、ともに、「遵守」よりも「逸脱」の行動基準の方が、私語の頻度が高い傾向が示された。一方、「私語2」に

Table 1-1 自分と他者の行動基準（メール）

自分／他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	42	16	19	13	90
	期待度数	28.24	16.76	13.88	31.12	
逸脱	度数	3	8	0	5	16
	期待度数	5.02	2.98	2.47	5.53	
同調	度数	7	3	7	7	24
	期待度数	7.53	4.47	3.70	8.30	
中立	度数	7	8	3	40	58
	期待度数	18.20	10.80	8.95	20.05	
合計		59	35	29	65	188

Table 1-2 自分と他者の行動基準（代返）

自分／他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	42	4	14	11	71
	期待度数	24.43	9.54	15.65	21.38	
逸脱	度数	4	6	3	7	20
	期待度数	6.88	2.69	4.41	6.02	
同調	度数	11	9	24	6	50
	期待度数	17.20	6.72	11.02	15.05	
中立	度数	7	6	0	32	45
	期待度数	15.48	6.05	9.92	13.55	
合計		64	25	41	56	186

Table 1-3 自分と他者の行動基準（内職）

自分／他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	30	7	13	11	61
	期待度数	15.91	9.28	9.95	25.86	
逸脱	度数	6	11	4	8	29
	期待度数	7.57	4.41	4.73	12.29	
同調	度数	6	3	11	4	24
	期待度数	6.26	3.65	3.91	10.17	
中立	度数	6	7	2	55	70
	期待度数	18.26	10.65	11.41	29.67	
合計		48	28	30	78	184

Table 1-4 自分と他者の行動基準（居眠り）

自分／他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	42	9	9	13	73
	期待度数	23.94	10.20	9.42	29.44	
逸脱	度数	7	6	2	7	22
	期待度数	7.22	3.08	2.84	8.87	
同調	度数	7	3	10	0	20
	期待度数	6.56	2.80	2.58	8.06	
中立	度数	5	8	3	55	71
	期待度数	23.28	9.92	9.16	28.63	
合計		61	26	24	75	186

については、「自分の行動基準」「他者の行動基準」とともに、有意な主効果は示されなかった。

3.3.3 「私語の内容」の区別

「私語」については、『あなたは授業と無関係の私語をしているが、周囲の人たちは授業に関する私語をしている』状況など、「授業と無関係の私語」（私語1）、「授業に関する私語」（私語2）を共に含む項目が存在する。また、『あなたは私語をしていないが、周囲の人たちは授業と無関係の私語をしている』状況が、(授

Table 1-5 自分と他者の行動基準（私語1）

自分／他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	36	9	29	5	79
	期待度数	30.42	10.98	27.46	10.14	
逸脱	度数	9	7	3	3	22
	期待度数	8.47	3.06	7.65	2.82	
同調	度数	24	9	27	4	64
	期待度数	24.64	8.90	22.25	8.21	
中立	度数	3	1	6	12	22
	期待度数	8.47	3.06	7.65	2.82	
合計		72	26	65	24	187

Table 1-6 自分と他者の行動基準（私語2）

自分／他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	53	3	18	9	83
	期待度数	49.05	4.24	18.39	11.32	
逸脱	度数	13	4	5	1	23
	期待度数	13.59	1.18	5.10	3.14	
同調	度数	21	0	14	3	38
	期待度数	22.45	1.94	8.42	5.18	
中立	度数	17	2	2	11	32
	期待度数	18.91	1.64	7.09	4.36	
合計		104	9	39	24	176

業と無関係の私語」だけでなく、「授業に関する私語」に対して影響を及ぼす可能性も考えられる。このため、前述した指標の算出方法に加えて、以下の方法でも指標を算出し、私語の頻度との関連について分析した（なお、前述の行動基準に関する分類方法と同様、R, S, T, Pの算出に使用した項目については、「自分の態度」の分類に使用したものを記載し、「他者の態度」については、SとTに対する評定値を入れ替えた）。

①「私語1s」（sはselfの略）…自分の行動（戦略）については「授業と無関係の私語」が含まれている項目のみを使用し、他者の行動については、「授業と無関係の私語」「授業に関する私語」の双方の項目を使用した。すなわち、自分については私語の内容（私語1か私語2か）を区別するが、他者については「私語をしているか否か」のみ区別して、私語の内容は区別しない算出方法である。具体的には、RとTについては、前述の「私語1」と同様である。Sについては、『あなたは私語をしていないが、周囲の人たちは授業と無関係の私語をしている』状況と『あなたは私語をしていないが、周囲の人たちは授業に関する私語をしている』状況に対する評定値を平均した値を指標とした。Pについては、『あなたも、周囲の人たちも、授業と無関係の私語をしている』状況と『あなたは授業と無関係の私語をしているが、周囲の人たちは授業に関する私語をしている』状況に対する評定値を平均した値を指標とした。

②「私語1n」（nはneighborhoodの略）…自分の行動については「授業と無関係の私語」「授業に関する私語」の双方の項目を使用し、他者の行動については「授業と無関係の私語」が含まれている項目のみを使

Table 2 「私語」に対する行動基準と頻度の分散分析結果

行動基準		私語1		私語2	
		自分	他者	自分	他者
遵守	平均値	2.57	2.60	2.57	2.45
	標準偏差	0.89	0.86	0.87	0.79
	<i>n</i>	80	76	85	109
逸脱	平均値	2.76	2.80	2.68	2.41
	標準偏差	0.80	0.84	0.82	0.70
	<i>n</i>	22	26	23	11
同調	平均値	2.70	2.59	2.65	2.66
	標準偏差	0.81	0.79	0.61	0.70
	<i>n</i>	64	65	39	42
中立	平均値	3.16	3.16	2.46	2.91
	標準偏差	0.83	0.93	0.66	0.87
	<i>n</i>	22	24	33	24
<i>F</i>		2.88	3.22	0.49	2.63
検定結果		<i>p</i> < .05	<i>p</i> < .05	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
偏 η^2 自乗		0.05	0.05	0.01	0.04

Table 3 「私語」に対する行動基準と頻度の分散分析結果

行動基準		私語1s		私語1n		私語2s		私語2n	
		自分	他者	自分	他者	自分	他者	自分	他者
遵守	平均値	2.65	2.53	2.70	2.54	2.65	2.55	2.53	2.52
	標準偏差	0.91	0.83	0.88	0.78	0.90	0.80	0.86	0.81
	<i>n</i>	99	93	62	55	53	45	104	123
逸脱	平均値	2.85	3.13	2.89	2.83	2.50	2.72	2.35	2.80
	標準偏差	0.69	0.74	0.88	0.92	0.80	0.71	0.74	0.65
	<i>n</i>	18	15	23	15	36	15	15	5
同調	平均値	2.66	2.67	2.57	2.66	2.55	2.49	2.73	2.49
	標準偏差	0.82	0.83	0.84	0.85	0.73	0.76	0.60	0.68
	<i>n</i>	44	51	83	100	67	102	36	36
中立	平均値	3.00	3.07	3.09	3.29	2.60	2.87	2.58	2.87
	標準偏差	0.78	0.93	0.76	0.90	0.63	0.92	0.48	0.88
	<i>n</i>	22	29	19	18	26	21	25	19
<i>F</i>		1.18	4.57	2.42	3.87	0.29	1.57	1.02	1.30
検定結果		<i>n.s.</i>	<i>p</i> < .05	<i>n.s.</i>	<i>p</i> < .05	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
偏 η^2 自乗		0.02	0.07	0.04	0.06	0.01	0.03	0.02	0.02

用した。「私語1s」の逆である。他者については私語の内容を区別するが、自分については私語をしているか否かのみ区別可能で、私語の内容については区別しない算出方法である。具体的には、RとSについては、前述の「私語1」と同様である。Tについては、「『あなたは授業と無関係の私語をしているが、周囲の人たちは私語をしていない』状況」と「『あなたは授業に関する私語をしているが、周囲の人たちは私語をしていない』状況」に対する評定値を平均した値を指標とした。Pについては、「『あなたも、周囲の人たちも、授業と無関係の私語をしている』状況」と「『あなたは授業に関する私語をしているが、周囲の人たちは私語をしていない』状況」に対する評定値を平均した値を指標とした。

③「私語2s」…自分の行動（戦略）については「授業に関する私語」が含まれている項目のみを使用し、他者の行動については、「授業と無関係の私語」「授業に関する私語」の双方の項目を使用した。具体的には、RとTについては、前述の「私語2」と同様である。Sについては、「『あなたは私語をしていないが、周囲の人たちは授業と無関係の私語をしている』状況」と「『あなたは私語をしていないが、周囲の人たちは授業に関する私語をしている』状況」に対する評定値を平均し

た値を指標とした。Pについては、「『あなたも、周囲の人たちも、授業に関する私語をしている』状況」と「『あなたは授業に関する私語をしているが、周囲の人たちは授業と無関係の私語をしている』状況」に対する評定値を平均した値を指標とした。

④「私語2n」…自分の行動については「授業と無関係の私語」「授業に関する私語」の双方の項目を使用し、他者の行動については「授業に関する私語」が含まれている項目のみを使用した。「私語2s」の逆である。具体的には、RとSについては、前述の「私語2」と同様である。Tについては、「『あなたは授業と無関係の私語をしているが、周囲の人たちは私語をしていない』状況」と「『あなたは授業に関する私語をしているが、周囲の人たちは私語をしていない』状況」に対する評定値を平均した値を指標とした。Pについては、「『あなたも、周囲の人たちも、授業に関する私語をしている』状況」と「『あなたは授業と無関係の私語をしているが、周囲の人たちは授業に関する私語をしている』状況」に対する評定値を平均した値を指標とした。

これらの方法によって分類された行動基準を独立変数、私語の頻度を従属変数とした、1要因4水準の対応のない分散分析を、「自分の行動基準」「他者の行動基準」ごとに行った（Table 3）。その結果、「私語1」については、「他者の行動基準」においてのみ（「私語1s」「私語1n」）有意な主効果が示され（ $ps < .05$ ）、ともに、「遵守」よりも「逸脱」の行動基準の方が、私語の頻度が高い傾向が示された。一方、「私語2」については、「自分の行動基準」「他者の行動基準」ともに、有意な主効果は示されなかった。

4. 考察

4.1. 自分および他者の行動基準の相違

「授業と無関係の私語」（私語1）については、「自分の行動基準」だけでなく、「他者の行動基準」も、私語の頻度に対して影響を及ぼしている可能性が示唆された。この結果は、卜部・佐々木（1999）の指摘を追認するものであり、行動基準を用いた測定・分析によっても、先行研究と同様の結果が得られることが示された。ただし、「自分の行動基準」「他者の行動基準」の相違については、「メール」「内職」においては、「他者の行動基準」の方が、規範逸脱行動に否定的な者が少ない傾向が示され、卜部・佐々木（1999）と同様の結果となった。しかし、「私語」に関しては有意な差は見られなかった。これは、本研究では、行動基準を用いた分析を採用することによって、「同調」や「中立」など、卜部・佐々木（1999）とは異なる観点からの検討が行われたことが一因となっていると思われる。また、本研究における「他者」は「自分の周りにいる人たち」ないし「あなたの席の近くに座って、授業を受

けている人たち」という限定的なものであったが、卜部・佐々木 (1999) では「クラスみんな」という比較的広いものであった。このような「他者」の定義の違いも、研究結果の相違の一因となったと考えられる。

なお、本研究では、「他者は、自分の行動基準と同様の行動基準を有している」と学生は考えている傾向も示された。したがって、「自分の行動基準」と「他者の行動基準」が交絡している可能性がある。また、本研究における「他者の行動基準」は、あくまで(回答者によって)「認知された」ものであり、実際に他者が持っている行動基準そのものではなかった。このため、今後、他者の行動基準について検討する際には、自分の質問紙と他者の質問紙が照合できるようにして、「実際の」他者の行動基準も測定し、規範逸脱行動への影響について、より厳密に検討する必要がある。さらに、「認知された」他者の行動基準と「実際の」行動基準の相違について分析していくことも重要となろう。

一方、「授業に関する私語」(私語2)については、行動基準の顕著な影響は示されなかった。出口・吉田 (2005) は、ともに .20 未満の微弱な相関ではあるが、学業に関する適応感と「授業に関する私語」との間には正の相関、「授業と無関係の私語」との間には逆に負の相関があることを報告している。このように、「授業に関する私語」は学業的に肯定的な影響を持ちうる行動であり、「先生の話で聞き逃したことについて話した」「板書でよく読めないところについて話した」といった、実行しないと授業内容の理解に否定的な影響を及ぼしかねない項目も私語尺度には含まれている。このため、行動基準の明確な効果が出にくかったのではないかと推測される。このような相違が示されたことから、2種類の私語における相違については、今後も留意して研究していくことが必要となろう。

4. 2. 教育実践への応用

私語に対する行動基準については、多様な指標を用いた分類も併せて行い、私語の頻度との関連について検討した。そして、「他者の行動基準」においてのみ、「私語1s」「私語1n」とともに、「遵守」よりも「逸脱」の行動基準の方が、私語の頻度が高い傾向が示された。末尾に「s」や「n」が付く指標は、2種類の私語を完全に区別するのではなく、部分的に混合して算出するものである。つまり、「『他者が持っている』と自分が考えている行動基準」(「他者の行動基準」)については、「授業と無関係の私語」か「授業に関する私語」かという区別は、「自分の行動基準」ほどには厳密に行われずに、私語の頻度(授業と無関係の私語)に影響を及ぼしていることが示唆された。つまり、他者の立場を考慮する際、「私語の内容が授業に関係しているか否か」というよりも、さらに単純に「私語をしているか否か」という観点で、状況を判断している可能性が示

された。一方、「自分の行動基準」においては、2種類の私語を混合した場合、行動基準の有意な主効果は示されなかった。したがって、「私語をしているか否か」という比較的単純な観点ではなく、「私語の内容が授業に関係しているか否か」という、より精緻な観点で状況を判断していることになる。「他者の行動基準」を考えることは、「『他者の行動基準』を推測する」という認知的な過程が含まれており、「自分の行動基準」を考えることよりも負荷が高いと思われる。このため、「自分の行動基準」よりも単純化された形で、私語の頻度との関連が示されたのではないかと考えられる。

「授業と無関係の私語」と「授業に関する私語」の区別が行われにくい、ということは、特に「同調」の行動基準を持つ者(「他者の行動基準」を「同調」と認知する者)にとっては、「授業に関する私語」の発生が「授業と無関係の私語」を誘発しかねないことを示す。前述のように「授業に関する私語」は学業的に肯定的な側面を持っており、このような私語を全面的に禁止することは、教育上、必ずしも適切でない可能性が考えられる。このため、より精確に他者の行動基準を認知するように促すことで、「授業に関する私語」を行っても、「授業と無関係の私語」が誘発されないように留意することも重要となると考えられる。

また、「他者は、自分の行動基準と同様の行動基準を有している」と学生は考えている傾向も示された。このことから、「逸脱」の行動基準を持つ学生は、自分と同じく「逸脱」の行動基準を持つ他者と一緒に授業を受けている可能性が高いと考えられる。したがって、規範逸脱行動を頻繁に行う傾向のある学生(「逸脱」の行動基準を持った学生)に対して、規範逸脱行動の抑制・防止のために「授業を一緒に受けている他者の立場を考えるように」と指導したとしても、その学生にとっての「他者」(自分の近くに座って授業を受けている学生)は、規範逸脱行動に対して肯定的な行動基準(「逸脱」)を持っている確率が高いということになる。この場合、期待された効果をあげることは難しい可能性が考えられる。よって、規範逸脱行動の抑制・防止という観点からは、「他者の立場を精確に考慮すること」を強調するだけでなく、「遵守」の行動基準を持つように学生に促し、他者の学生が持つ行動基準を精確に認知できるように指導していくことも重要となろう。

—引用文献—

- Axelrod, R. (1980a). Effective choice in the prisoner's dilemma. *Journal of Conflict Resolution*, 24, 3-25.
- Axelrod, R. (1980b). More effective choice in the prisoner's dilemma. *Journal of Conflict Resolution*,

- 24, 379-403.
- Axelrod, R. (1984). *The Evolution of Cooperation*. NY: Basic Books. (アクセルロッド, R. 松田裕之 (訳) (1998). つきあい方の科学：バクテリアから国際関係まで ミネルヴァ書房)
- Cialdini, R. B., Reno, R. R., & Kallgren, C. A. (1990). A focus theory of normative conduct: Recycling the concept of norms to reduce littering in public places. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 1015-1026.
- Deguchi, T. (2013). *Classroom rule-breaking behaviors and adjustment to campus life*. Poster session presented at the 13th European Congress of Psychology (FR-P172), Sweden.
- Deguchi, T. (2014). A simulation of rule-breaking behavior in public places. *Social Science Computer Review*, **32**, 439-452.
- 出口拓彦 (2014). 規範逸脱行動に対する行動基準と態度 教育実践開発研究センター研究紀要, **23**, 81-88.
- 出口拓彦・吉田俊和 (2005). 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連－大学生活への適応という観点からの検討－ 社会心理学研究, **21**, 160-169.
- Durmusccelebi, M. (2010). Investigating students misbehavior in classroom management in state and private primary schools with a comparative approach. *Education*, **130**, 377-383.
- Kelly, H. H., Holmes, J. H., Kerr, N. L., Reis, H. T., Rusbult, C. E., & Van Lange, P. A. M. (2003). *An atlas of Interpersonal Situations*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- 北折光隆 (2006). 授業中の私語に関する研究：悪質性評価の観点から 金城学院大学論集 (人文科学編), **3**, 1-8.
- 北折光隆・太田伸幸 (2011). 講義中の私語抑制対策に関する効果測定：座席指定とTAによる見回り実施に対するFD評価項目の比較検討 東海心理学研究, **5**, 8-14.
- 北折光隆・吉田俊和 (2000). 違反抑止メッセージが社会規範からの逸脱行動に及ぼす影響：大学構内の駐輪違反に関するフィールド実験 実験社会心理学研究, **40**, 28-37.
- 小牧一裕・岩淵千明 (1997). 授業規範：反規範行為における意識構造 日本心理学会第61回大会発表論文集, 381.
- 黒川正流 (1990). 大学生の恋人関係と友人関係の相互依存構造 日本社会心理学会第31回大会発表論文集, 46-47.
- 水野邦夫 (1998). 授業規範の構造及びその違反に対する許容度について 聖泉論叢, **6**, 89-102.
- 水野邦夫 (2001). 親の養育態度が大学生の授業規範意識に及ぼす影響について 聖泉論叢, **9**, 21-31.
- Rapoport, A., & Guyer, M. (1966). A taxonomy of 2 x 2 games. General systems: *Yearbook of the society for the advancement of general systems theory*, **11**, 203-214.
- Reno, R. R., Cialdini, R. B., & Kallgren, C. A. (1993). The transsituational influence of social norms. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 104-112.
- 斎藤和志 (1999). 第7章 対人的相互作用 吉田俊和・松原敏浩 (編著) 社会心理学：個人と集団の理解 ナカニシヤ出版 pp. 123-140.
- Scodel, A., Minas, S., Ratoosh, P., & Lipetz, M. (1959). Some descriptive aspects of two-person non-zero-sum games. *Journal of Conflict Resolution*, **3**, 114-119.
- 島田博司 (2002). 私語への教育指導：大学授業の生態誌2 玉川大学出版部
- 杉村 健・小川嗣夫 (2003). 大学生の授業に対する規範意識の検討 人間文化研究, **12**, 85-96.
- Thibaut, J. W., & Kelley, H. H. (1959). *The Social Psychology of Groups*. New York: Wiley.
- ト部敬康・佐々木薫 (1999). 授業中の私語に関する集団規範の調査研究：リターン・ポテンシャル・モデルの適用 教育心理学研究, **47**, 283-292.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折光隆 (1999). 社会的迷惑に関する研究 (1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **46**, 53-73.

－ 謝 辞 －

調査にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。なお、本研究の一部は、科学研究費補助金 (課題番号 22730508, 26380885) の援助を受けました。